

乳幼児突然死症候群 (SIDS) 発症の背景としての育児習慣に関するアンケート調査 (分担研究：乳幼児突然死症候群に関する研究)

1) 吉永宗義、2) 福井ステファニー

要約：乳幼児突然死症候群 (SIDS) の発症原因は明らかにされていないが、発症に関係するリスク因子は知られている。今回はそのリスク因子のうち特に育児習慣に関連するものについて正常1ヶ月乳児の母親を対象にアンケート調査を行なった。対象は日本人258例、日本在住の外国人16例である。従来よりリスク因子として注目されている妊娠中の喫煙率、うつぶせ寝の頻度は低く、反面リスクを減少させると考えられている積極的な母乳栄養率は約70%であった。

見出し語：乳幼児突然死症候群、SIDS、育児環境、母乳、うつぶせ寝

【緒言】乳幼児突然死症候群 (以下SIDS) はこれまで本邦を始め世界各国での多くの研究にもかかわらず、その発症原因は明かとなっていない疾患である。しかし、疫学調査の結果本疾患はいくつかの誘因、すなわちリスク因子が指摘されてきた。本疾患は、その定義からも解るように発症を予測して予防することは困難であるが、これらのリスク因子を遠ざけることによって発症をある程度減少させることができる可能性がある。

リスク因子には母親そのものや出生前の問題 (母親の年齢、喫煙状況、妊娠合併症など)、児自身が持つ問題 (未熟性や発育不全、無呼吸発作など)、さらには出生後の生活環境からくるもの

など多岐にわたっている。一方では、SIDSの発症頻度が国や人種によって差が見られるということも知られており、国や人種というグループのもつ文化的差異が影響を与える生活様式の違いによって生じていると考えられる。生活様式の中でも育児習慣はSIDSの発症に密接に関係していると考えられ、うつぶせ寝などの点については実際多くの研究がされている。ところが、本邦においては一般乳児の育児方法に関する基礎となるデータが不足していたため、SIDSの育児面でのリスク因子を把握することや、他の国・地域との比較検討が困難であった。そこで、今回我々は正常に出生した健康1ヶ月乳児を対象として育児に関する調

1) 国立長崎中央病院小児科：Division of Pediatrics, Nagasaki Cyuo National Hospital

2) 国際SIDS連盟日本代表：Executive director, SIDS family association in Japan

査を行なったので報告する。

【対象と方法】育児方法は地域によってかなり異なると考えられ、また育児指導を行なう分娩施設や小児科医のポリシーなどが関係するため、1施設に限定することを避け以下の6施設に母親へのアンケート調査を依頼した。対象となった施設は、聖母会天使病院（北海道）、セントクリニック（福島県）、東京女子医科大学病院（東京都）、おび産婦人科医院、安永産婦人科医院、国立長崎中央病院（長崎県）であり、日本の北、中央、南という分布、また大学病院、総合病院、産科診療所という分娩施設の形態も意識して依頼した。さらに日本に在住し育児を行なっている外国人も対象とした。アンケート調査用紙はNew ZealandのOtago大学のDr. TaylorとDr. Mackayらが作成した育児習慣に関するinternational surveyを元にして、日本人用のものと、日本在住の外国人用のものを作成して使用した。この調査用紙は2部で構成されており、1部は出生早期に記載してもらうもので、家庭環境や妊娠中の問題点についての設問が中心である。2部目は1ヶ月児の育児環境や育児方法についての設問が設けられている。なお、この調査は平成4年11月から平成5年1月出生の児を対象とした冬期の育児についてのものであり、暖房や着衣の点についてはその季節性が前提となっている。

【結果】アンケート調査は全部で258例を回収したが、アンケート項目によっては空欄のところもあり各項目の回答数は190～235例であった。本邦在住外国人に対するアンケート調査は対象者が少なく今回は16例に留まり十分な検討はできなかった。

出生早期のアンケートによる対象のプロフィールをみると、母親の平均年齢は 28.7 ± 4.3 (19～41)

歳、父親の平均年齢は 31.0 ± 5.1 (19～45) 歳であった。母親の現在の就業率は18.6%であり、復職予定時期は 9 ± 11.1 (1～60) ヶ月であった。同居している家族構成では、児の祖母、祖父と同居しているものがそれぞれ19.1と14.6%であり、児の同胞がいるものが44.7%であった。母親の妊娠既往回数は平均 2.0 ± 1.1 回、出産回数は 1.7 ± 0.9 回であり、前回の出産と今回の出産との間隔は平均 34.4 ± 21.1 ヶ月であった。妊娠中の問題がみられたものは47.3%で、そのうち貧血と切迫早産がそれぞれ22.3と18.8%で多かった。また、妊娠中の母体の体重増加は平均 9.9 ± 3.3 (-1.3～22) Kgであった。妊婦健診には定期的に受診しているものが95.5%と多く、妊婦健診初診は平均 8.3 ± 3.9 週であった。しかし、母親学級へは約半数は参加しておらず、これは主に経産婦の不参加によるものであった。出生児の平均在胎週数は 339.0 ± 1.2 (36～41) 週で、平均出生体重は 3060 ± 405.5 (2130～4100) gであった。

母親の喫煙について図1に示した。喫煙していない母親は、以前喫煙していたが現在はやめているものをあわせると95%であった。同居している家族の喫煙者は約55%であったが、喫煙者の約20%は家庭内での喫煙を控えていた。

1ヶ月健診時の平均体重は 4206.4 ± 531.5 (2350～5580) gであった。

児の就寝している寝具は図2に示したようにベビーベッド、赤ちゃん用の布団を利用しているものが多いが、大人（特に母親）と一緒に布団でやすんでいるものが25.1%にみられた。しかし、添い寝に関する質問では50%が添い寝をしていると回答しており、このことから、同じ布団で寝な

くても、母親は児が就寝するときには一緒に横になっているものと考えられた。児の就寝時の姿勢(体位)は図3に示すように仰臥位が約70%と最も多く、腹臥位のみと記載があったものは約15%であった。また、起床時の姿勢はほぼ就寝時の姿勢と同じであった。一方、日本在住の外国人の場合には、腹臥位と仰臥位がほぼ半々であった。母親は児の着衣については自由に運動できるように心がけており(97.0%)、平均2.6±0.8枚の着衣をさせていた。着衣の内容は木綿性の下着が主体で(98.3%に使用)、これにつなぎの服を重ねて用いるものが多く(65%)みられた。寝具では固い敷き布団を用いているものが多く(64.9%)、児の頭が2.5cm以上も沈むようなふかふかの布団を用いているものは1例のみであった。一方うつぶせ寝用のものを使用しているものも8例あった。掛物は平均2.2±0.6枚であり、綿が入っている掛け布団とタオルケットを用いているものが多かった。

図4には1ヶ月時の栄養法について示した。母乳のみで栄養されている児は36.9%であり、母乳中心でミルクを少しというものまであわせると、母乳栄養が全体の70%で積極的に行なわれていると考えられた。この時期に離乳食を開始しているものは234例中5例(2.1%)のみであった。

児が感冒に罹した場合や環境温度が低下して寒くなった場合、母親がどのように着衣させたりどのように暖房を行なうかについては明らかな傾向はみられなかった。

【考察】今回のアンケート調査は、出生前、新生児自身、さらに育児に関するリスク因子を考慮した内容になっている。これらのリスク因子のうち、オーストラリアで行なわれているSIDS発症率減少

のためのキャンペーンの対象となっている、妊娠中の喫煙の禁止、母乳栄養推進、うつぶせ寝の中止、温めすぎにならないようにという点について主に検討した。今回の調査によると母親の喫煙率は低く、うつぶせ寝の頻度も欧米ほど高くなかった。母親の喫煙率が低いことはSIDSの低発症率に関連するのみならず、妊娠中の胎児発育の面や、一般健康面でも推奨されるべきことであり、今後も低喫煙率が維持されることが望まれる。一方、うつぶせ寝についてはオーストラリアやオランダでその頻度が減少したとともにSIDSの発症も減少してきているという報告もあり、本邦ではうつぶせ寝の頻度が低いことがSIDS発症率が低いことに関係しているとも考えられた。しかし、うつぶせ寝には生理学的な多くのメリットもあり、今後の疫学的、生理学的研究の結果をみて慎重に結論が出されるべき問題であろう。母乳栄養率は、完全母乳栄養とまでは行かないものの、母乳栄養中心に行なっているものを加えると約70%であった。この率を高いと考えるか低いと考えるかの議論は今回の調査の主目的ではない。しかし、1ヶ月時の完全母乳栄養率は分娩施設によっては90%を超えているところもあり、今後母乳栄養率を向上させることは母乳の栄養学的・免疫学的メリットなどに加え、SIDSの発症予防という面でも必要であると考えられる。

今回は正常1ヶ月児を対象に調査を行なったが、今後は年齢の巾を広げ対象数を増やすとともに、SIDS症例での育児習慣がいかなるものであったかの検討も行なうことによって、より正確な育児に関するリスク因子の解明につながることを考えられる。また、年単位での長期間の育児習慣

の変遷を調査しSIDSの頻度の年間推移との関係を検討することによって、育児習慣とSIDSとの因果関係に新たな事実が見いだせる可能性もあると思われる。

図1. 母親の喫煙状況

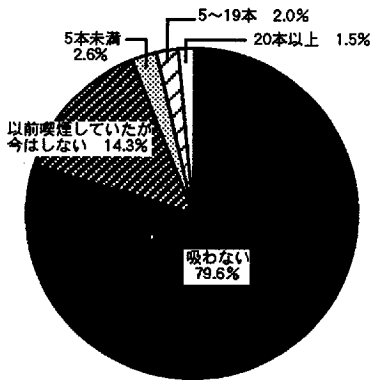


図2 1ヶ月時の寝具

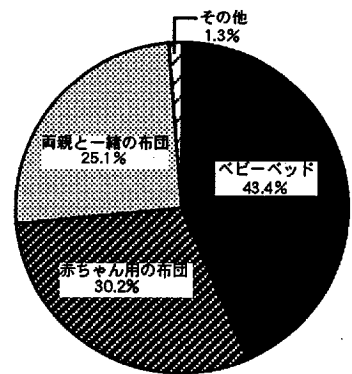


図3. 1ヶ月児の就寝時の姿勢

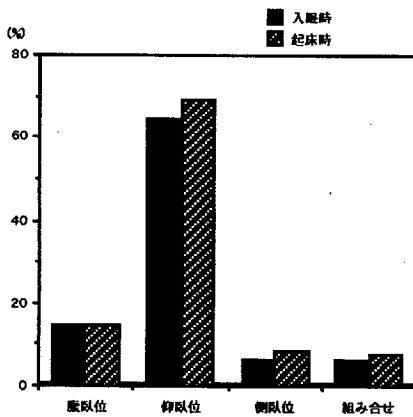
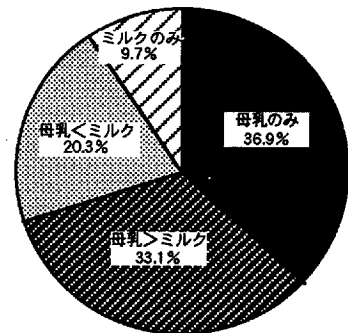


図4. 1ヶ月健診時の栄養法





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:乳幼児突然死症候群(SIDS)の発症原因は明らかにされていないが、発症に関係するリスク因子は知られている。今回はそのリスク因子のうち特に育児習慣に関連するものについて正常1ヶ月乳児の母親を対象にアンケート調査を行なった。対象は日本人258例、日本在住の外国人16例である。従来よりリスク因子として注目されている妊娠中の喫煙率、うつぶせ寝の頻度は低く、反面リスクを減少させると考えられている積極的な母乳栄養率は約70%であった。